No.01　地域と連携した総合的な防災訓練

■管　　内　空　知
■分　　類　☑避難訓練　☐防災教室　☐防災に関する授業　☐その他（　　）
■教育課程　☐教科（　　科）　☐総合的な学習の時間　☑特別活動
■校　　種　☐小学校（低）☐小学校（中）☐小学校（高）☑中学校　☐高等学校
■取組のポイント

学校が、関係機関や団体（消防署・警察署・町会・市役所など）、地域住民と連携した総合的な防災訓練を実施することにより、避難時の心構えや避難方法等についての理解を深め、生徒の危機意識の高揚及び地域住民の一員である自覚を促すことができる。

■取組の実際

ねらい

1　防災訓練を通して、災害時に当該中学校が果たす役割や機能について、生徒及び地域住民が理解する。
2　地域住民と合同で実施することにより、生徒の防災意識の高揚を図るとともに、自らも地域住民の一員であることの自覚を促す。

内　容

地域と一体となった総合的な防災訓練を通して、関係機関・団体が連携を確認するとともに、生徒と地域住民の防災意識の高揚を図っている。

【訓練の流れ】

時間	場面設定	生徒の動き	地域住民の動き
13:00	○震度７の地震が発生		・地域住民は、自宅から徒歩で、避難所である当該中学校に避難する。
14:15		・生徒は、各学級で避難訓練の事前指導を受ける。 〈事前指導〉 ・避難時の心構え ・避難経路や避難方法等の確認	・地域住民は、当該中学校の多目的ホールにおいて、担当者から避難時の心構えの説明を受ける。
14:35	○震度６の余震が発生	・生徒及び地域住民は、それぞれグラウンドに避難する。 ・避難完了後、合同防災訓練を行う。 参加した地域住民の方が要援護者の役となり、生徒が、救護所まで担架で搬送する演習を行っています。 ・消防署及び校長から講評を行う。	

成果と課題

○　避難時の心構えや避難経路、避難方法等の確認など、生徒に対する事前指導を充実させたことにより、危機意識の高揚が図られ、緊急時の心構えや行動の仕方等をより確かなものにすることができた。
○　地域住民と合同で訓練を行ったことにより、地域住民の防災意識の高揚が図られるとともに、生徒の地域住民としての自覚を促すことができた。
●　防災訓練の実施状況について様々な視点から分析し、生徒の防災意識を高める活動を工夫するとともに、改善策を地域住民と共有する手だてを講じていく必要がある。

No.02　緊急地震速報を活用した教科における防災の指導

■管　　内　空　知
■分　　類　☐避難訓練　☐防災教室　☑防災に関する授業　☐その他（　　）
■教育課程　☑教科（　理　科）　☐総合的な学習の時間　☐特別活動
■校　　種　☐小学校（低）☐小学校（中）☐小学校（高）☐中学校　☑高等学校
■取組のポイント

理科の授業において、地球の構造から地震のメカニズム、日本における緊急地震速報のしくみと限界、地震発生時の適切な対応についての学習を系統的に行うことにより、災害発生時に自分の身を守る方法や情報の活用について理解を深め、危機対応能力を高めることができる。

■取組の実際

ねらい

地震波の特徴を活用した日本の緊急地震速報の仕組みを理解させるとともに、防災の観点から、緊急地震速報があった場合の対応や、地震に対する平時の備えについて考えさせることを通して、実際に災害にあった場面で適切な対応ができるようにする。

内　容

○　科　　目　　理科基礎
○　対　　象　　第３学年
○　単　　元　　「宇宙・地球を探る…プレートテクトニクスの成立」
○　本時の目標　　緊急地震速報の仕組みと特徴を理解させるとともに、防災の観点から地震に対する平時の備えや発生時の対応について考え、自分の言葉でまとめる。
○　展開（概要）

指導内容	生徒の学習活動	評価の観点等
○緊急地震速報とは何か ・緊急地震速報の仕組み ・緊急地震速報の課題 ・NHKと民放の緊急地震速報　放送音声の違い等 ・携帯電話と緊急地震速報	・説明事項をノートにまとめる。 ・発問に答える。 ・速報と予報の違いについて理解する。 ・放送事業者毎に緊急地震速報の音声などが異なることを理解する。	関心・意欲・態度 知識・理解
○地震発生時の対応について ・緊急地震速報があった時 ・揺れが始まった時 ・揺れが収まった時 ・二次的な災害	・それぞれの時点について、学校にいる場合、電車に乗っている場合、家にいる場合などを想定し、どのように行動すべきかを考えてワークシートに記入する。 ・考えた内容について、隣の席の生徒と話し合う。 ・結果を発表する。	思考・判断・表現

成果と課題

○　緊急地震速報は予報ではなく現に地震が起こったことを示していることや、「一般向け」の他に「高度利用者向け」の速報があることなど、緊急地震速報の仕組みと課題に対する理解を深めることができた。
○　緊急地震速報があった場合や、実際に地震を感じた場合の対応について、様々な時間帯や場面を状況を想定しながら備えておくことの必要性について、理解を深めることができた。
●　津波への対応など、学校が内陸部にあるという地理的な環境からは想定しにくい状況について、具体的にイメージしながら対応を検討できるよう工夫することが必要である。

No.03　地域や専門家と連携した樽前山の噴火を想定した防災教育

■管　　内　石　狩
■分　　類　☐避難訓練　☐防災教室　☑防災に関する授業　☐その他（　　）
■教育課程　☑教科（　理科　）　☑総合的な学習の時間　☐特別活動
■校　　種　☐小学校（低）☐小学校（中）☑小学校（高）☐中学校　☐高等学校

■取組のポイント

○　自然を尊重する態度を育むために、地域の自然について、恵みと災いの両方を学習する。
○　災害時において、主体的に行動する態度を育むために、自然災害についての知識と体験的な活動による気付きを結び付ける。
○　地域の防災拠点施設、防災担当者、火山専門家との積極的な連携を図る。

■取組の実際

ねらい

○　自然の恵みと災いを受け入れ、自然環境を大切にする心を育む。
○　樽前山や自然災害に関する知識を身に付けさせ、自ら的確に判断し、迅速な行動ができるようにする。

内　容

本校では、第５学年の総合的な学習の時間において、「自然・環境との共生」をテーマに学習する中で、自然災害に関する学習を行っている。

［防災教育の指導計画］
恐怖を先に与えないよう、自然の恵みから学習する。

学年	教科等	季節	学習内容
第５学年	総合的な学習の時間	春	①春の自然観察・調査
		夏	②夏の自然観察・調査
		秋	③秋の自然観察・調査
			④千歳の自然環境調査
			⑤自然災害調査
			⑥そなえーるで災害体験
			⑦災害図上訓練（DIG）
			⑧１年間のまとめ
第６学年	理科	秋	⑨「土地のつくりと変化」
			⑩噴火装置で火山灰の広がりを確認
			⑪火山専門家の出前授業

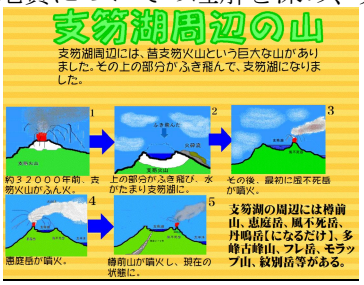
■学習内容①～④について
　児童は、学校裏の青葉公園や千歳市の自然の恵みについて調べていく中で、「樽前山という火山があり、噴火したことがある」ことを見つけた。

■学習内容⑤⑥について
　樽前山の噴火以外の洪水・地震・台風・土砂崩れなど、自然災害についてさらに詳しく調べるために、千歳市防災学習交流センター「そなえーる」を見学した。有珠山噴火時の火山性地震などの自然災害を模擬体験しながら身の守り方を教えてもらったが、児童は「本当に起こったら、どうしたらいいのだろう…」という不安をもった。

■学習内容⑦について
　千歳市危機管理課防災係と連携し、校区の地図に、病院・公共施設・公園など避難可能な場所に色を塗って避難場所などを確認するなどの災害図上訓練を行った。災害図上訓練により、地図上のあるポイントで災害が発生したと想定し、避難経路や安全な避難方法についても確認することができた。

■学習内容⑧について
　児童は、一連の学習を通して、自然災害に対し、日ごろからしっかりと備え、的確な行動を取ることによって自分の命を守ることが大切であることを学んだ。

■学習内容⑨～⑪について
　本年度の第６学年理科「土地のつくりと変化」の学習では、単元の最後に樽前山の噴火と実験装置で火山灰が広がる様子を確認した。さらに、火山学者（北海道大学名誉教授　宇井忠英氏）と地質専門家（北海道地質調査業協会　若松幹男氏）による出前授業で樽前山や地域の地質についての理解を深め、児童の防災意識をさらに高めた。



自然災害調査（火山）

そなえーるで地震体験

災害図上訓練（DIG）

成果と課題

　地域の防災施設や専門家と連携することで、地震や火山噴火にどのように備え、どのように行動すべきなのかを考えさせることができた。今後は、低学年から系統的に防災教育を年間指導計画に位置付けるなどして、児童の防災意識をさらに高める必要がある。

No.04　生徒の防災意識や災害時の危機回避能力を高める実践

■管　　内　後　志
■分　　類　☑避難訓練　☐防災教室　☐防災に関する授業　☑その他（学校安全計画）
■教育課程　☑教科（　　科）　☐総合的な学習の時間　☑特別活動
■校　　種　☐小学校（低）☐小学校（中）☐小学校（高）☑中学校　☐高等学校
■取組のポイント

各教科等における防災教育の指導内容を明確にし、実践的な避難訓練を行うとともに、教育活動全体を通して生徒一人一人の防災意識を高め、万が一の危機を回避するための適切な行動が取れるようにする。

■取組の実際

ねらい

各教科等における防災教育の指導内容を関連付けた学校安全計画の作成、津波を想定した実践的な避難訓練の実施により、生徒の防災意識を高める。

内　容

1　学校安全計画の工夫・改善

平成２１年度に作成した「学校安全計画」について、防災教育の観点から見直し、各教科等の指導内容と関連を図って避難訓練を実施することができるようにするなど、意図的・計画的に教育活動全体を通して防災教育を推進することができるよう工夫・改善を図った。

【平成２３年度　学校安全計画】

月			７・８月	９月	１０月
月の目標			健康と安全に気を付けよう	学校祭を安全に	交通法規
道徳教育			**・①生命の尊重**	・自主自律	・生きる喜び
安全教育	安全学習	理科		・天気とその変化（２）	・大地の変化
		美術	・道具使用の注意	・印刷用具の使い方	・ナイフの使い方
		保健分野	・傷害の防止	**・②自然災害**	・健康と環境
	安全指導	学級活動	**・③避難訓練後の振り返りと日常の備え**	・耐久遠足の取組と安全	・交通法規の意義と安全
		学校行事	・避難訓練（地震・津波：生徒には予告なしで実施）	・耐久遠足	・避難訓練 ・学校祭
安全		対人管理	・海における安全 ・夏季休業中の部活の安全	・身体の安全及びけがの予防	・学校祭の準備と安全
管理		対物管理	・夏季休業中の校舎内外の安全	・校舎内外の整備	・防火設備･用具点検
学校安全に関する組織的活動			・校内安全点検（集約と改善）	・秋の交通安全運動	・校内点検

（表中の数字は右の工夫・改善のポイントと対応しています）

【工夫・改善のポイント】

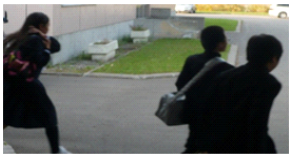
①避難訓練との関連を図り、内容項目を設定するとともに、教材や資料を工夫する。
②実生活とのかかわりを生徒が意識できるよう工夫する。
③避難訓練での体験が実生活で生きて働く能力となるよう、すべての学級が一斉に学級活動において避難訓練のまとめを行う。

2　危機回避能力を高める避難訓練の実施

自ら考えて行動し、安全で正しい避難行動を取ることのできる生徒の育成を目指し、避難場所やアナウンスの内容など避難訓練の工夫・改善を行った。

〈避難訓練の実際〉　実施日：平成２３年７月１３日

◆各学級における事前指導
○「自分の命は自分で守り、安全に行動できる」ことを十分に指導する。



◆校内非常ベルを鳴らし、緊急放送で避難を指示する。

【放送の内容】
「緊急連絡。静かに聞いて下さい。只今、地震が発生しました。先生の指示に従い、身の安全を確保して下さい。」
「地震はおさまりました。津波警戒情報も入りました。震度４、津波の到着は１５分後、高さは２ｍと予想されます。話をせず、先生を先頭に、速やかにサブグランドに避難して下さい。」

〈工夫した点〉
①生徒が非常時に備え、緊張感をもって訓練に参加するよう「突発訓練」とした。
②具体的に状況をアナウンスし、よく聞き行動するよう指導した。
③避難場所は、津波を想定し、グランドからより高台のサブグランドへ変更した。また、この高さよりも高い津波が来る可能性がある場合は、裏山に率先して登っていくように指導した。

成果と課題

○　「学校安全計画」に、各教科等における防災教育に関する指導内容を明確にし、教師が意図的・計画的に指導したことで、生徒の防災意識を高めることができた。
●　災害の際に、状況に応じて判断し、マニュアルどおりではなく臨機応変な対応や避難ができるよう、より一層指導を工夫する必要がある。

No.05　津波についての基本的な知識を身に付け、避難訓練の充実を図る取組

■管　　内　胆　振
■分　　類　☑避難訓練　☑防災教室　☐防災に関する授業　☐その他（　　）
■教育課程　☐教科（　　科）　☐総合的な学習の時間　☑特別活動
■校　　種　☑小学校（低）☑小学校（中）☑小学校（高）☐中学校　☐高等学校

■取組のポイント

１　避難訓練前に津波についての基本的な知識を身に付けることのできるよう学校が独自に製作したＤＶＤやワークシートを活用した事前指導の工夫
２　津波を想定し、地域のハザードマップを活用した３段階の避難訓練の実施による安全な避難経路を確認する指導の工夫

■取組の実際

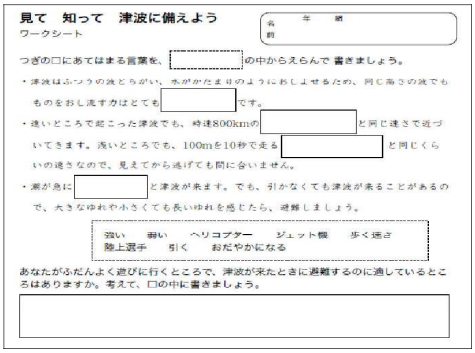
ねらい

児童が津波についての基本的な知識を身に付けるとともに、津波を想定した３段階の避難訓練の実施を通して、安全な避難経路を確認する。

内　容

１　避難訓練前に津波についての基本的な知識を身に付けることのできるよう学校が独自に製作したＤＶＤやワークシートを活用した事前指導の工夫

本校では、児童が津波について、基本的な知識を身に付け安全に避難できるよう、映像やアニメーションを使ってわかりやすく説明した学校独自の津波防災教育ＤＶＤを製作・活用し、避難訓練の事前指導に活用している。


見て　知って　津波に備えよう
ワークシート
名前　　年　組
つぎの□にあてはまる言葉を、□の中からえらんで 書きましょう。
・津波はふつうの波とちがい、水がかたまりのようにおしよせるため、同じ高さの波でもものをおし流す力はとても□です。
・遠いところで起こった津波でも、時速800kmの□と同じ速さで近づいてきます。浅いところでも、100mを10秒で走る□と同じくらいの速さなので、見えてから逃げても間に合いません。
・海が急に□と津波が来ます。でも、引かなくても津波が来ることがあるので、大きなゆれや小さくても長いゆれを感じたら、避難しましょう。
強い　弱い　ヘリコプター　ジェット機　歩く速さ
陸上選手　引く　おだやかになる
あなたがふだんよく遊びに行くところで、津波が来たときに避難するのに適しているところはありますか。考えて、□の中に書きましょう。

ＤＶＤは、児童が「津波の特徴や津波が起こる仕組み」、「津波の速さ」、「避難するタイミングと場所」、「家族との避難場所の確認」、「学校での避難経路」などについて、共通理解を図ることができるよう、収録内容を工夫している。

また、津波についての基本的な知識を身に付けるとともに、家庭で避難の仕方などについて話し合うことができるよう、ワークシートを工夫している。

２　津波を想定し、地域のハザードマップを活用した３段階の避難訓練の実施による安全な避難経路を確認する指導の工夫

本校では、災害の状況に応じて適切な避難を行うことができるよう、地震・津波を想定した避難訓練を３段階に分けて実施している。

第１次避難～地震による落下物から身を守るための教室内での避難。
第２次避難～各教室からグランドへの避難。
第３次避難～標高約３５メートルの高台にある外部避難場所への避難。

＜避難訓練の様子＞

校地外へ避難する際には、ハザードマップを基に、地震発生時の崖崩れや家屋倒壊、窓ガラス破損などの危険を避けることができるよう、できるだけ危険性のある路地を通らない経路を設定し、道路横断の際は、教職員が横断中のプレートを掲げて車を停止し安全を確保している。

成果と課題

○　教材を工夫した事前指導や状況に応じた避難訓練を実施することにより、安全を確保しながら、速やかに避難する方法を身に付けることができた。
●　地域や保護者との連携を図った訓練内容となるよう、地域や保護者と合同の避難訓練を行うなど、避難訓練の在り方を一層工夫する必要がある。

No.06　総合的な学習の時間における「地域学習」を通して、生徒の防災意識を高める取組

■管　　内　胆　振
■分　　類　☐避難訓練　☐防災教室　☑防災に関する授業　☐その他（　　）
■教育課程　☐教科（　　科）　☑総合的な学習の時間　☐特別活動
■校　　種　☐小学校（低）☐小学校（中）☐小学校（高）☑中学校　☐高等学校
■取組のポイント

1　「地域学習」を通して、生徒の防災意識を高める総合的な学習の時間の工夫
2　地域人材を活用し、地域について理解を深める体験的な学習活動の工夫

■取組の実際

ねらい

総合的な学習の時間において、地域の火山や自然環境、防災対策について調べ、災害時の適切な行動について考える学習を通して、生徒の防災意識を高める。

内　容

1　「地域学習」を通して、生徒の防災意識を高める総合的な学習の時間の工夫

本校では、総合的な学習の時間の「地域学習」において、体験的な野外学習や調べ学習を通して、地域の火山や自然環境、災害と防災について生徒が主体的に考え、防災意識を高める学習を位置付けている。

野外学習では、生徒が有珠山西山火口群や銀沼火口を自分の目で確認することにより、噴火による地形の変化や、噴火当時の被害の状況について理解を深めることができるよう工夫している。

<野外学習の様子>

また、噴火による被害を災害実験で再現したり、ハザードマップで危険箇所を確認したりするなどの体験的な学習活動を通して、噴火による災害や防災対策について、理解を深めることができるよう工夫している。

生徒は、火山と隣接しながら生活する自分たちの地域の課題について、さらに興味や関心をもったことを調べ、「子ども議会」において、自分の考えを発表する。

<「子ども議会」の様子>

<「子ども議会」における生徒からの提案～町民の防災意識を高める取組について>

私たちは野外学習の中で、噴火による災害の影響を受けた場所を実際に見学し、噴火の恐ろしさや人の無力さを痛感しました。その中で私たちができることは、いつ起こるか分からない自然災害に対する備え、「防災意識」を高めることです。

私たちの学校では毎年、火災や地震が起きたときの避難訓練が行われますが、家族や地域の方々と避難訓練をした経験がありません。したがって、地域ぐるみの「防災意識」を高めるためにも、町民全体で避難訓練を実施することを提案します。

2　地域人材を活用し、地域について理解を深める体験的な学習活動の工夫

地域の火山マイスターを講師として招聘し、地域の自然環境や防災対策の説明していただくなど、地域人材を活用した学習活動を工夫している。

また、職場体験学習では、自然災害と向き合いながら地域を愛し、地域を支えてきた人々と触れ合うことにより、生徒が地域についての理解を深めることができるよう学習活動を工夫している。

<地域人材を活用した学習活動の様子>

成果と課題

○　総合的な学習の時間において、地域の自然環境や防災についての体験的な学習を工夫することにより、生徒の防災意識を高めることができた。
●　地域人材のより効果的な活用ができるよう、学習内容を見直すとともに連携の在り方を工夫する必要がある。

No.07　津波を想定した防災避難訓練と防災学習（津波のメカニズム）

■管　　内　胆　振
■分　　類　☑避難訓練　☐防災教室　☐防災に関する授業　☐その他（　　）
■教育課程　☐教科（　　科）　☐総合的な学習の時間　☑特別活動
■校　　種　☐小学校（低）☐小学校（中）☐小学校（高）☐中学校　☑高等学校
■取組のポイント

１　シミュレーションを行うことによってどのように行動すべきかを理解することを第１の目的とし、「急いで逃げる」ことを意図しない。
２　防災避難訓練終了後、各ＨＲにおいてワークシートを活用して、放送により、学校の置かれている地理的条件や津波のメカニズムについて事後学習を行う。

■取組の実際

ねらい

実際の災害（地震・津波）を想定して避難を行い、避難ルートの確認、情報機器類の操作方法の確認、指示連絡系統の確認を行うとともに、訓練結果を検証することにより、課題の抽出、整理、解決を図り、次回の訓練内容の充実につなげる。

内　容

１　日　　時　　平成２３年９月８日（木）　　１５時２０分～１６時１０分
２　災害の種類　　地震・津波（地震発生場所：室蘭沖を想定）

《災害（地震・津波）の想定》
室蘭沖でマグニチュード８の地震が発生、室蘭市で震度６強の地震が発生、津波が発生したものとする。津波の予想高さは９ｍ、津波警報発令後、室蘭市への津波到達が１５分後とする。なお、災害が起きた時間は、通常の授業時と想定し、火災は発生しなかったものとする。

４階は、海抜高度１５ｍと高く、また、全校生徒７００余名、教員５０名程度の収容は可能であり、水道・トイレ・放送設備・テレビ等も設置されており、一時的な避難であれば対応できる。

３　訓練の概要

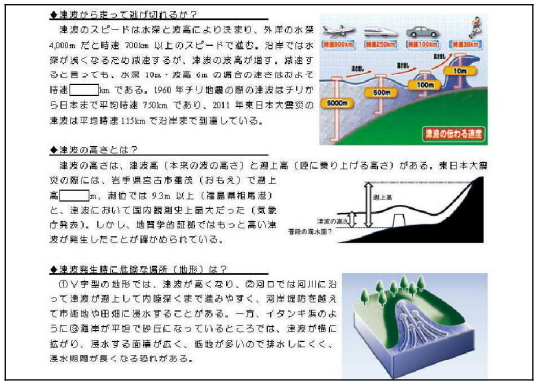
①事前移動（４階以外の教室から４階への避難を行うため）
⇨ ②地震発生　地震・津波情報の確認、校内状況把握
⇨ ③避難指示・誘導　生徒・教員は４階へ避難
⇨ ④人員点呼　各避難教室に入室後、人員の確認
⇨ ⑤生徒の状況の集約　各クラスのホーム委員が本部に報告
⇨ ⑥訓練終了　放送にて避難状況の情報提供・移動指示
⇨ ⑦移動　生徒・担任は自分のHR教室へ戻る
⇨ ⑧防災学習及び講評　ワークシートを配付し、放送により行う。

４　防災学習資料

2011.09.08
北海道○○ 高等学校防災委員会
津波について考えてみよう
～○○ 高校　避難シミュレーション学習資料～

◆○○ 高校の海抜高度を知っているか？
グーグルアースなどで調べてみると、本校の海抜高度は［　　］mである。海側の国道のあたりの高さは［　　］mである。しかし、津波は水の流れであり、段差の斜面を駆け上るため、２～３ｍ以上の津波であれば本校に押し寄せて来る可能性がある。もちろん今回の東日本大震災の際に東北地方を襲った規模の津波（気象台発表：津波高 93 ｍ）であれば恐ら本校に津波が到達することになる。

◆どこに逃げるべきなのか？
○○ 高校の校舎４階の高さは［　　］m以上あり、校舎は鉄筋コンクリートであるから、この周辺でもっとも安全性の高い避難場所であると言える。裏山の栄富士は標高 50 ｍもあるが、①崖がある②急斜面である③海側にある④登るべき道が山の裏側や国道の向こう側にしかない、という弱点がある。
津波は自分がどこにいると言に発生するかわからない。登下校、買い物のとき、宿泊時など、様々な場面で「今ならどこに逃げるか」をシミュレーションしてみよう。いざというとき言にしっかりとした判断ができるようになる筈だろう。


◆津波から走って逃げ切れるか？
津波のスピードは水深と波高によりきまり、外洋の水深 4,000m だと時速 700km 以上のスピードで進む。沿岸では水深が浅くなるため減速するが、津波の波高が増す。減速すると言っても、水深 10m・波高 6m の場合の速さはおよそ時速［　　］km である。1960 年チリ地震の際の津波はチリから日本まで平均時速 750km であり、2011 年東日本大震災の津波は平均時速 115km で沿岸まで到達している。
◆津波の高さとは？
津波の高さは、津波高（本来の波の高さ）と遡上高（陸に乗り上げる高さ）がある。東日本大震災の際には、岩手県宮古市重茂（おもえ）で遡上高［　　］m、遡上では 93m 以上（海抜標相高値）と、津波において国内観測史上最大だった（気象庁発表）。しかし、地質学的証拠ではもっと高い津波が発生したことが確かめられている。
◆津波発生時に危険な場所（地形）は？
①Ｖ字型の地形では、津波が高くなり、②河口では河川に沿って津波が遡上して防波堤を越えて市街地や田畑に浸水することがある。一方、イタンキ浜のように③海岸が平坦で砂丘になっているところでは、津波が横に拡がり、浸水する面積が広く、低地が多いので排水しにくく、浸水期間が長くなる恐れがある。

成果と課題

○　事後アンケートでは92%の生徒が「役に立った」と回答し、89%の生徒が「意識が変化した」と回答したほか、教員もほとんどの項目に対して肯定的な回答をするなど、防災意識を高めることができた。
●　放送での指示については１割強の生徒が否定的な意見を持っており、実際の災害発生時には放送が使えなくなる可能性が高いことを踏まえ、避難時の有効な指示方法について検討する必要がある。

No.08　事前・事後の指導の充実を図った避難訓練の取組

■管　　内　日　高
■分　　類　☑避難訓練　☐防災教室　☐防災に関する授業　☐その他（　　）
■教育課程　☐教科（　　科）　☐総合的な学習の時間　☑特別活動
■校　　種　☑小学校（低）☑小学校（中）☑小学校（高）☐中学校　☐高等学校
■取組のポイント

震災や地震への不安感や恐怖感を抱いている児童の心理的ストレスを取り除き、安全に避難することができるよう、事前・事後の指導の充実を図る。

■取組の実際

ねらい

○　事前・事後の指導を通して、児童一人一人に震災や地震について考えさせることにより、不安感や恐怖感を軽減するとともに、生命を大切にする心情を育む。
○　避難訓練を通して、児童一人一人に安全な避難の仕方について指導することにより、適切に判断し、安全に行動する能力や態度を育てる。

内　容

1　事前指導

○　避難訓練の趣旨の確認
・生命を守るために、教師の指示をしっかり聞き、静かに安全に行動することについて、学年の発達の段階に応じて説明する。
○　児童の実態把握と避難の仕方の確認
・学級担任は、地震への不安感や恐怖感を抱いている児童の話を聞き、共感的な理解を示し、適切に行動することで身を守ることができることを理解させることにより、安心感をもたせる。
・避難訓練の大まかな流れ、「お・は・し・も」（おさない、走らない、しゃべらない、もどらない）をキーワードに行動することについて説明する。

2　避難訓練の実施

児　　童	教　　師
【緊急地震放送】 ・教室内では、机の下に体を隠す（教室以外では、上から物が落ちてこない場所に移動する）。 ・教員や放送の指示をしっかり聞く。	・学級担任は、児童の安全を確認し、避難経路の確認を行う。 ・学級担任以外は、校内の安全を確認する。 ・学級担任は、児童に放送の指示を聞くよう促す。
【グラウンドへ避難】 ・「お・は・し・も」に留意し、上履きのまま避難する。 ・集合旗（赤色）を目印に避難し、整列して座る。	・校長は、全校の状況を掌握する。 ・学級担任は、児童の転倒や巻き添えなどに十分留意し、屋内は歩行、屋外は小走りで避難させる。 ・学級担任以外は、校内の巡回を行う。 ・学級担任は、避難の状況を校長に報告する。
【津波を想定した２次避難】 ・集合旗を先頭に坂を登り、高台の潮見球場へ避難する。 ・１年生と６年生、２年生と５年生、３年生と４年生が並んで、各学年１列で避難する。	・校長は、全校の状況を掌握する。 ・負傷者や特別な配慮の必要な児童に対応するため、緊急車両を待機させる。 ・学級担任は、避難の状況を校長に報告する。

3　事後指導

○　地震についての話合い
・東日本大震災や地震の体験などから児童が感じたことを交流する場を設定する。
・学級担任は、受容的な対応を心掛け、児童に安心感をもたせる。
・震災で被災された人に対して自分ができること、震災にあったときにどのように行動すべきかを考え、交流する場を設定する。

成果と課題

○　事前・事後の指導の充実を図ることにより、地震に対する不安感や恐怖感を和らげ、児童の心理的なストレスを軽減させ、適切に行動することの大切さに気付かせることができた。
○　実際の避難訓練を通して、避難方法及び時間などの課題が明らかになり、改善方策について検討することができた。
●　２次避難の実施方法や負傷者の運搬方法について、より安全な方法を明らかにする必要がある。

No.09　危機や危険への対処方法を学び、命を守り相手を思いやる心を育てる ～地域と連携し全校体制で取り組む防災教育～

■管　　内　渡　島
■分　　類　☑避難訓練　☑防災教室　☐防災に関する授業　☐その他（　　）
■教育課程　☐教科（　　科）　☐総合的な学習の時間　☑特別活動
■校　　種　☑小学校（低）☑小学校（中）☑小学校（高）☐中学校　☐高等学校
■取組のポイント

・地震、津波、火災の各災害に係る避難訓練をそれぞれ別の日に実施する。
・地域の消防署・消防団と連携した防災意識の啓発活動と救急救命講習を実施する。

■取組の実際

ねらい

・小規模、少人数の特色を生かし、全校体制で避難の仕方や災害時の対処について体験的に理解を深め、地震、津波、火災の各災害に係る防災意識を高めながら、自他の安全を守るとともに、体験を通して相手を思いやろうとする心をもった児童を育成する。

内　容

1　地震、津波、火災を想定した避難訓練の実施

毎年実施している地震と火災に加えて、平成23年度は、新たに津波を想定した避難訓練を実施した。それぞれ別の日程で実施をし、子どもが３つの災害に対する危険回避や安全確保の仕方について、深く理解できるようにした。また、津波に係る避難場所については、海抜高度を基にして、低学年でも移動しやすいようにいくつかの高台について検討し決定した。

	地震対応訓練	津波対応訓練	火災対応訓練
ねらい	地震発生時、揺れによる落下物から身を守り、指示に従い、素早く安全に避難する。	津波発生時、校舎から津波到達想定時間内に、指示に従い、素早く安全に高台へ避難する。	火災発生時、煙や炎から身を守り、指示に従い、素早く安全に避難する。
日　時・方　法	４月２０日（水）午前、授業中の地震発生を想定し避難訓練を実施した。	５月２日（月）午前、授業中に、地震発生に伴う１０ｍの津波を想定し避難訓練を実施した。	８月３０日（火）午前、授業中に家庭科室からの出火を想定し避難訓練を実施した。

2　地域や関係機関と連携した取組

昭和２２年に本地区において大火が発生し、大きな人的・物的な被害を受けた経験から、地域住民の防火に対する意識は高く、平成元年には地域住民により、少年消防クラブが結成された。少年消防クラブは、「安全で住みよいわたしたちの地区を自分たちの手で！」というスローガンを基に活動し、地区の消防署や消防団員から緊急救命法、消火方法、止血法など応急手当及びＡＥＤの講習を受けている。

消防署・消防団員の指導による初期消火訓練の様子

少年消防クラブ一年間の主な活動

少年消防クラブ入団式 ➡ 地区防火パレード ➡ 安全花火講習会 ➡ 救急救命法講習会 ➡ 少年消防クラブ文集作成

一年間の活動をまとめて文集を作成しています。

成果と課題

○　地震や津波などの自然災害及び火災に対する避難訓練の日程を別の日に設定したことにより、子どもに素早く安全に避難する意識や方法をより深く理解させることができた。
○　教職員が災害の程度や規模、海抜高度などを踏まえ避難場所の検討をし、避難訓練を実施したことにより、子どもに避難誘導の手順や方法について共通理解を図ることができた。
●　今回は、校舎内から一斉に避難したが、子どもたちが別の教室等で学習している状況など、様々なケースに応じた避難の仕方や方法、対処に係る指導を充実する必要がある。

No.10　町の学校防災計画との関連を図る危機管理体制の構築
～大津波を想定した避難訓練の実施～

■管　　内　渡　島
■分　　類　☑避難訓練　☐防災教室　☐防災に関する授業　☐その他（　　）
■教育課程　☐教科（　　科）　☐総合的な学習の時間　☑特別活動
■校　　種　☐小学校（低）☐小学校（中）☐小学校（高）☐中学校　☑高等学校
■取組のポイント

町教育委員会において策定された学校防災計画に基づき大津波を想定した避難訓練を実施し、学校の危機管理マニュアルの見直しを図る。

■取組の実際

ねらい

東日本大震災を教訓に、地震・津波等の緊急時において、安全・確実・迅速に対応し、避難できるよう、町の学校防災計画に示された校外の避難経路を確認し、避難方法を体得する。

内　容

背景

本校は海岸から約１kmの、海抜３mに立地し、周囲には、1.7km離れた小高い場所に海抜40mの公園がある。

東日本大震災後、町教育委員会では、避難場所をこの公園とし、学校防災計画を改訂した。

学校防災計画の概要

Ⅰ　震災時の教員動員体制
Ⅱ　初期対応
Ⅲ　学校と災害対策本部、町教育委員会との関係
・学校対策本部の設置
・授業中に発生した場合の避難について
→高校の避難場所を上記の公園と規定
Ⅳ　防災教育の充実

学校防災計画に基づいた避難訓練の実施

町教委の学校防災計画の改訂を受け、本校では、津波を想定し、1.7km離れた公園への避難訓練を行った。

(1)　想定
・５校時中に震度６の地震が発生した。
・緊急津波警報及び「15mを超える津波が30分以内に到達する」という防災無線によるに避難命令が出る。
・防災計画で定められた公園に避難する。

(2)　地震発生時における対応の指導
・カーテンのある教室はカーテンを引く。
・避難路を確保するため教室の扉は開ける。
・机の下などに頭を隠し、身の安全を確保する。
・ガスの元栓を閉める。

(3)　津波における避難時の指導（迅速かつ安全に避難）
・靴のかかとをふまない。
・つまずいたりぶつかり合ったりしない程度の小走りで、決められた経路で移動する。
・競争ではないので速さを競わない。
・最終避難者の安全を確認する。

避難訓練の結果

・学校防災計画に示された避難経路や、避難場所までの所要時間を確認することができた。
・全生徒が緊張感をもち避難訓練に取り組むことができた。

避難訓練の様子

成果と課題

○成果
・学校全体における危機管理意識の高揚
・全校生徒が避難場所まで安全に避難する所要時間が17分であることを踏まえた、学校の危機管理マニュアルの見直し

●課題
・夏季の除草、冬季の除雪など、避難経路の日常的な確認と確保
・津波到着予想時刻までに避難場所に避難できない場合、海抜12mの本校屋上への避難や、本校屋上を越える規模の津波予想への対応についての検討
・高校周辺の地域住民の避難経路、避難場所の確保も含めた避難体制の構築

No.11　地域と連携した避難訓練

■管　　内　檜　山
■分　　類　☑避難訓練　☐防災教室　☐防災に関する授業　☐その他（　　）
■教育課程　☐教科（　　科）　☐総合的な学習の時間　☑特別活動
■校　　種　☑小学校（低）☑小学校（中）☑小学校（高）☐中学校　☐高等学校
■取組のポイント

児童が地震や津波などの災害から自らの身を守ることができるようにするため、町内放送の指示で高台に各自で避難するなど、避難訓練を町の防災訓練と連携して実施する。

■取組の実際

ねらい

・避難訓練を町の防災訓練に合わせ、町全体の体制の中での災害時の行動を把握する。
・地震により津波が発生した時の適切な避難経路を考え、避難方法を学ぶ。
・教職員の指示に従って、避難の原則「押さない・走らない・しゃべらない・戻らない」（お・は・し・も）を守り、落ち着いて、素早く避難する。

内　容

【日　時】
第１回：平成２３年７月１２日（震災慰霊祭の日）
第２回：平成２３年９月１日（町の防災訓練）
【避難場所】
一次避難場所：グランド南側の高台（学校の裏山）

※地震の時は津波が来ることを想定しているため、一次避難はグランドではなく、高台に集合する。

【実施方法】

地震発生の非常ベル
・担任は机の下に避難させる。その時、机の脚をつかむことを指導する。
・ベランダを開放する。体育館では、中央部分に避難させるとともに、非常口を開放する。

全校に避難指示（放送）をする。（非常ベルの後１５秒後）
・「ただいま地震が発生しました。津波がくることが予想されますので、児童の皆さんは担任の先生の指示に従って避難してください。」（二度繰り返す。）
※２回目の避難訓練は町内放送の指示で行動するため、校内放送は使用しない。（防災行政無線が聞こえ難い場合、校内放送を使用する。）

学校外にいる時に地震が起こった場合も、近くの高台に避難することができるよう町内放送の指示で行動する訓練をする。

避　難
①各担任は、避難指示の放送後、児童を整列させて避難させる。
（ヘルメットの装着、上靴のまま、担任は出席簿等、人員を確認できるものを持参）
※休み時間の場合は割り当て区域での児童を誘導し、確認する。
②集合場所に避難後、各担任は整列・点呼を取り次第、本部（校長）へ報告する。
③児童は、各学年ごと来た順に整列する。
④校長先生のお話を聞く。

津波の際は、高台に逃げることを優先するため、点呼も高台で行う。

避難所（小学校のホール）への移動・学級へ戻って反省
※高台への避難後、避難所となる小学校へ移動するところまでを避難訓練とし、ヘルメットは着用のまま行う。

成果と課題

○　地域と連携した避難訓練を実施することにより、子どもに、周囲の大人に頼らず、自分の命は自分で守ろうとする意識と実践的な態度を育むことができた。
●　一人一人の子どもの家庭内での避難に関する約束ごとを把握するとともに、学校の方針を保護者と共有しながら、避難訓練の内容の改善を図る必要がある。

No.12　地域の施設見学や調べ学習、実験を取り入れた授業

■管　　内　上　川
■分　　類　☐避難訓練　☑防災教室　☐防災に関する授業　☐その他（　　）
■教育課程　☐教科（　　科）　☑総合的な学習の時間　☐特別活動
■校　　種　☐小学校（低）☑小学校（中）☐小学校（高）☐中学校　☐高等学校
■取組のポイント

噴火時の泥流対策として造られている砂防ダムの見学（「親と子の火山砂防見学会」として実施）を行うとともに、調べ学習の充実に向けて、施設の方から話を聞く場面を設定し、噴火のイメージを具体的にもつことができるよう、模擬実験を取り入れる。

■取組の実際

ねらい

十勝岳の噴火という本町における災害の特性を理解するとともに、噴火に伴う泥流や火砕流、地震などの災害について理解する。

内　容

【活動内容】単元名『十勝岳と人々とのかかわり（親と子の火山砂防見学会）』（全１０時間）

１　「十勝岳についてどんなことを知っているかな」（２時間）

○　過去の経験から知っていることを交流するとともに、個人の課題を設定する。

２　親と子の火山砂防見学会　主催：上川総合振興局旭川建設管理部（６時間）

○　**「十勝岳の噴火について学ぼう」**
・大正時代にあった泥流被害や昭和３７年の噴火の様子について、ビデオ映像を通して理解する。
・砂防ダムの必要性や建設の様子をビデオ映像を通して学ぶ。

○　**「大正泥流について学ぼう」**
・町内に残っている大正泥流の被災跡を見学するとともに、当時の様子を知り、泥流被害の状況や泥流の恐ろしさ、避難方法、防災体制など、危機管理意識や危機管理能力を高める。
※見学場所：①上富良野橋、②高田道雄宅跡、③遭難記念碑

○　**「町を守る仕組みについて学ぼう」**
・災害から町を守る目的で建設された富良野川上流の砂防ダムやえん堤を見学するとともに、施設の概要説明を聞くことにより、本町の防災施設について理解する。
※見学場所：①３号えん堤、②２号透過型ダム

○　**「火山や泥流災害について学ぼう」**
・炭酸飲料水を用いた火山噴火の模擬実験を通して、火山噴火の仕組みについて理解する。

児童の感想
「砂防ダムは、想像以上に大きかった。火砕流のことを調べてみたくなった。」

３　「学習したことをまとめよう」（１時間）

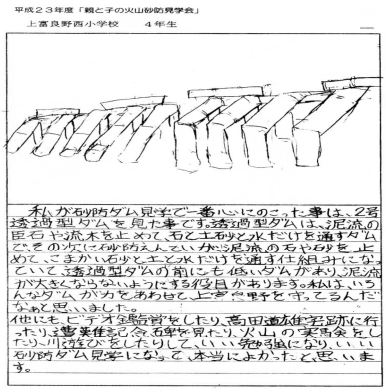
○　見学会で学んだ十勝岳と人々とのかかわりについてまとめるとともに、今後の学習の課題を設定する。

４　「もっとくわしく調べよう」（１時間）

○　設定した課題をもとに調べ学習を行うとともに、グループで発表会を行う。

・児童は、過去に発生した災害のビデオ映像や災害の爪痕が残る施設を見学したことにより、自分の住んでいる地域に災害が起こる可能性があることを知り、防災施設や避難の仕方などについて理解を深めることができた。

【児童の感想】
「噴火や火砕流、泥流について知ることができてよかった。いつも、自分のすんでいる地域の自然災害などについて、注意していこうと思った。」



〈児童のまとめ〉

成果と課題

○　砂防ダムの見学を行ったことにより、噴火による災害に加えて、火砕流や泥流についても理解を深めることができた。
○　上川総合振興局旭川建設管理部と連携を図ったことにより、専門的な説明や児童の質問への適切な回答があり、探究的な活動の充実を図ることができた。

No.13　関係機関との連携による理科における防災教育の充実

■管　　内　留　萌
■分　　類　☐避難訓練　☐防災教室　☑防災に関する授業　☐その他（　　）
■教育課程　☑教科（理科）　☐総合的な学習の時間　☐特別活動
■校　　種　☐小学校（低）☐小学校（中）☑小学校（高）☐中学校　☐高等学校
■取組のポイント

本事例は、単元の導入と終末に、関係機関と連携を図った学習活動を位置付け、学習内容と身近な地域で発生した自然災害とを結び付けながら考えることができるようにし、児童の防災に対する関心を高めるよう工夫する。

■取組の実際

ねらい

流れる水の量や速さと土地の変化の関係を、仮説を立てて条件を制御しながら実験を行うことを通して、土地の様子は増水によって大きく変化することがあるということを理解し、身近な水害の原因や防災について考えようとする態度を育てる。

内　容

単元の指導計画（全１２時間）

時	単位時間の目標	□主な学習活動	◆評価規準
1	過去におきた地域の水害の様子を知り、流れる水の働きに興味・関心をもつ。	□川の洪水時の被害や川の様子について地域の防災に関わる方から話を聞き、洪水が起きた理由を考える。	◆流れる水の働きに興味・関心をもち、意欲的に調べようとする。【関】
2	流れる水と土地の変化の関係について仮説を立てることができる。	□流水実験機を用いて流れる水の働きを観察し、流れる水と土地の変化の関係について仮説を立てる。	◆流れる水と土地の変化の関係について仮説を立て、説明している。【思】
3	流れる水と土地の変化の関係について、変える条件と変えない条件を整理しながら実験の計画を立てることができる。	□流れる水と土地の変化の関係について、流れる水の速さや水の量に着目し、実験の計画を立てる。	◆流れる水の速さや水の量のうち、変える条件と変えない条件を整理しながら実験の計画を立てている。【思】
4 5	流れる水と土地の変化の関係について、調べる実験からきまりを見いだし説明することができる。	□流れる水の速さと土地の変化の関係について調べる実験を行い、実験の結果から流れる水の働きについてまとめる。	◆変える条件と変えない条件に着目しながら計画的に実験を行っている。【技】 ◆流れる水の速さや水の量と土地の変化の関係について、実験の結果からきまりを見いだしている。【思】
6 7	これまでの実験の結果と川の様子を比較し、流れる水の働きについて理解することができる。	□写真で川の上流、中流、下流の様子を調べ、実験の結果と比較する。	◆流れる水には、土地を浸食したり、石や土などを運搬したり堆積させたりする働きがあることを理解している。【知】
8 9	既習内容を生かして、水害を防ぐ方法を考えることができる。	□水害を防ぐ方法について図で表し、説明する。	◆流れる水の働きを想起し、水害を防ぐ方法を考えている。【思】
10 11 12	流れる水の働きを自分たちの生活に当てはめて考えることができる。	□地域の防災ダムを見学し、地域の防災に関わる方の話を聞く。 □「学んDE防災」などを活用し、学んだことを地域の防災に当てはめて考え、まとめる。	◆雨の降り方によって流れる水の速さや水の量が変わり、増水により土地の様子が大きく変化する場合があることを理解している。【知】 ◆自然の力や大きさを感じ、流れる水の働きを地域の防災に当てはめてみようとしている。【関】

単元の導入に、「学んDE防災」への書き込み、身近な地域で発生した水害の映像の視聴、地域の防災に関わる方から当時の様子の説明といった学習活動を位置付けることで、本単元の学習内容と地域の防災を関係付けながら考えさせることができた。

実験の結果と地域の川の様子を比較する学習活動を位置付けることで、子どもが学習内容と実生活を結び付けて考えることができるようにした。

単元の終末に、防災ダムの建設現場を見学し、防災ダム建設の目的や防災ダムの働きについて説明を聞く学習活動を位置付けることで、本単元の学習内容を実感を伴って理解し、身近な防災についての関心を高めることができた。

成果と課題

○　単元の振り返りでは、「防災ダムは、水によって運ばれる石や土を防ぐ働きがあることが分かった。」、「防災ダムは大雨による土砂災害から私たち守ってくれることがが分かった。」などの発言があり、学習内容と身近な防災とを関係付けて考える姿が見られた。
●　防災教育と関係の深い他の単元についても、指導内容を見直し、発達の段階に応じた効果的な防災教育が展開できるように指導計画の工夫・改善を図る必要がある。

No.14　外部講師を活用し、津波を想定した避難する訓練

■管　　内　宗　谷
■分　　類　☑避難訓練　□防災教室　□防災に関する授業　□その他（　　）
■教育課程　□教科（　　科）　□総合的な学習の時間　☑特別活動
■校　　種　□小学校（低）□小学校（中）☑小学校（高）□中学校　□高等学校
■取組のポイント

外部講師を活用し、事前に教職員の防災についての研修を行うとともに、地震発生後に津波警報が発令されたことを想定した避難訓練を実施し、避難経路の確認や日頃から生命や身体の安全を守ることなどの防災への意識を高める。

■取組の実際

ねらい

自然災害（津波）に備えて、正しい防災知識を身に付けるとともに、高い場所へ避難することなど、安全の確保や避難経路を確認することができる。

内　容

◆　防災に関する教職員研修の実施

○　外部講師を活用した研修について
避難訓練を実施するに当たって、稚内地方気象台の職員を招き、事前に防災についての研修を行い、防災について理解を深める機会を設けた。

◆　津波を想定し、高い場所へ避難する訓練の実施

○　学級における事前指導
避難訓練を実施するに当たり、学級活動において事前に津波による被害の恐ろしさや、震度６から震度７程度の揺れについて指導する時間を設定し、避難経路や避難場所、避難の際の注意事項等について指導した。

裏山へ避難する様子

○　高い場所への避難
避難訓練では、緊急地震速報を受け、強い揺れへの備えや、頭を守る姿勢で机の下に避難したりするよう指導した。
また、地震発生後に津波警報が発令されたとの想定で、学校の裏山にある神社の周辺に避難した。
その際、避難に際して教職員の動きや避難誘導の体制、避難誘導の経路等について確認した。
事前に指導した内容を踏まえ、児童は速やかに裏山の高い場所へ避難することができた。

稚内地方気象台職員による講評

○　外部講師による講評
訓練終了後に、稚内地方気象台の職員から講評があり、児童は地震や津波など、自然災害に対する防災について理解を深めることができた。

成果と課題

○　事前指導では、自然災害（津波）に備えて、安全の確保や避難経路を確認したり、高い場所へ避難したりすることを通して、正しい防災知識を身に付けることができた。

No.15　避難訓練との関連を図った防災に関する授業

■管　　内　宗　谷
■分　　類　☑避難訓練　☐防災教室　☑防災に関する授業　☐その他（　　）
■教育課程　☐教科（　　科）　☐総合的な学習の時間　☑特別活動
■校　　種　☐小学校（低）☐小学校（中）☐小学校（高）☑中学校　☐高等学校
■取組のポイント

全校生徒を対象に、稚内地方気象台の職員を講師に招き、地震と津波を取り上げた防災に関する学習を行い、この学習の後に避難訓練を実施し、防災への意識を高める。

■取組の実際

ねらい

屋内外それぞれで災害に遭った場合の対処法や、地震のメカニズムについて理解を深め、正しい防災知識を身に付けることができる。

内　容

◆　防災に関する授業

○　地震や津波についての学習

昨年３月に発生した東日本大震災を踏まえ、避難訓練の事前学習として、稚内地方気象台の職員を講師に招き、地震発生時の対処の仕方や地震のメカニズムについて理解を深めた。

この授業では、生徒が自然の脅威を実感できるよう、映像で津波の迫力や被害の様子等を紹介した。また、地震発生時には特に頭を守るよう注意することや、津波発生時には高い場所に速やかに避難することなどについて説明があった。

外部講師による講話

◆　地震を想定した避難訓練

○　事前の学習を生かした避難訓練

授業中にサハリン沖で地震が発生したことを想定し、避難口の確保や頭を守るために机の下に避難し、揺れが収まるのを確認した上で、グラウンドに避難した。

また、その際、教職員の動きや避難誘導の経路等について確認した。

事前に実施した防災に関する授業で学習した内容を踏まえ、生徒は速やかに避難することができた。

グラウンドに避難する様子

成果と課題

○　防災に関する授業で学習した地震や津波が発生した際の対処法や、地震のメカニズムについて理解を深めることができた。また、防災に関する授業と避難訓練を関連付けることで正しい防災知識を身に付けることができた。

No.16　地震・津波を想定した関係機関との連携による避難訓練

■管　　内　オホーツク
■分　　類　☑避難訓練　□防災教室　□防災に関する授業　□その他（　　）
■教育課程　□教科（　　科）　□総合的な学習の時間　☑特別活動
■校　　種　□小学校（低）□小学校（中）□小学校（高）☑中学校　□高等学校
■取組のポイント

・海岸から約200m、海抜３ｍという学校の立地条件を踏まえ、地震・津波を想定した避難訓練を行う。
・臨場感のある実際的な避難訓練とするため、計画段階から気象台との連携を図る。

■取組の実際

ねらい

・地震や津波の恐ろしさを理解させる。
・自他の生命を守ろうとする態度を養う。
・災害発生時に、迅速かつ的確に行動できるようにする。

内　容

１　津波を想定した避難訓練の概要

＜訓練の流れ＞

【事前指導】
① 東日本大震災の状況を確認し、訓練の意義について考える。
② 訓練の流れと避難時の注意事項を確認する。

①地震発生（能取沖を想定）
↓
②校内放送
（緊急地震速報の報知音の放送）
・１回目…地震発生
・２回目…津波注意報発令

＜写真提供：北海道新聞社＞

③生徒避難開始
・第一次避難場所（校門前）に整列
↓　教頭の指示により、第二次避難場所へ移動開始
↓　第四中～藻琴神社～原生牧場（市の指定避難所）へ
↓　（移動距離約１．６㎞、所要時間約１８分）
・第二次避難場所（原生牧場）に整列
↓
④避難完了・講話（校長・気象台職員）

【講話・事後指導】
① 避難の状況に係る講評と今後の防災の取組について気象台職員からお話しいただく。
② 各学級でアンケートを実施し、訓練の振り返りを行う。

＜生徒の感想＞
・自分の身は自分で守ることを避難訓練で自覚することができた。
・本当に津波が起こっても、今回の避難訓練のようにしっかりと行動したい。

＜工夫した点＞
・地震発生時の学校の対応や生徒の避難経路の設定等について、気象台職員の助言のもと実施計画を立てた。連携１
・地震発生や津波注意報発令の校内放送では、気象台職員が持参された緊急地震速報のデモテープを使用した。連携２
・避難場所への移動では、網走地方気象台職員も同行し、その状況について確認していただいた。連携３
・避難完了後、避難の様子について気象台職員に講評していただくとともに、防災についての日常の心構えや準備等について話していただいた。連携３

２　その他の防災教育の取組

・全校集会において、岩手県大槌町立大槌北小学校からの手紙を４月から３回にわたって紹介し、被災地の具体的な状況を伝え、防災への意識を高めるよう指導した。
・「津波てんでんこ」等の資料を基に、津波の恐ろしさや命の大切さ、避難する際の心構えなどについて、学級指導を実施した。
・学校便りにおいて、全校集会の説話の内容を紹介したり、避難訓練の意図や様子を知らせたりするなど、防災教育について保護者への啓発を行った。

成果と課題

○　気象台と連携を図り、臨場感のある訓練を行ったことにより、地震や津波の恐ろしさを理解させ、迅速に行動しようとする態度を養うなど、生徒の防災意識を高めることができた。
●　関係機関との連携を図るとともに、地域住民との協力や高齢者・幼児への支援など、地域と連携した避難体制を確立する必要がある。

No.17 ・地震・津波を想定した避難訓練
・災害イメージ訓練（Disaster Imagination Game）の手法を活用した授業

■管　　内　オホーツク
■分　　類　☑避難訓練　☐防災教室　☑防災に関する授業　☐その他（　　）
■教育課程　☐教科（　　科）　☐総合的な学習の時間　☑特別活動
■校　　種　☐小学校（低）☐小学校（中）☐小学校（高）☐中学校　☑高等学校

■取組のポイント

・海岸から約１Km、海抜12mという学校の立地条件を踏まえ、地震・津波を想定した避難訓練を行う。
・生徒全員が討論や発表などにより、地震発生時の対応を考える災害イメージ訓練を行う。

■取組の実際

ねらい

・通常の避難経路が使用できない冬季において、迅速に高台まで避難するための経路や方法を確認させる。
・大災害発生時にとるべき行動を考えさせ、防災の意識を高めさせる。

内　容

１　津波の発生を想定した避難訓練の概要

＜訓練の流れ＞

地震発生
・大津波警報発令
・予想到達時刻まで20分
・最大波20mを想定
（学校は海抜12m）

避難指示
・緊急全校放送
「大津波警報が発令されました。高台に直ちに避難してください。」

避難開始
・約２Km離れた海抜56mの高台に避難
・冬季に通行可能な避難経路を使用

避難完了
・所要時間19分

＜生徒の感想＞
・坂道が急で大変だったが、災害が起きたときの心の準備ができた。
・実際に災害が起きたときは、私たちが学校に避難してきたお年寄りや子どもを誘導できるようになりたい。
・真冬に避難する場合には、通れない道があることや防寒対策が必要になることに気付いた。
・まとまった人数が一斉に避難することの難しさが分かった。

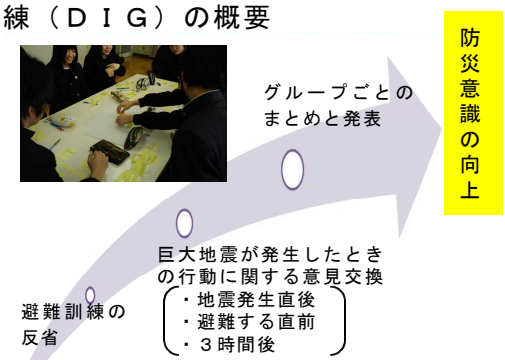
＜工夫した点＞
・事前に、「学んDE防災（津波編）」を活用して、津波が押し寄せるスピードやエネルギーの大きさなどについて指導し、迅速に避難することの大切さを認識させた。

２　巨大地震の発生を想定した災害イメージ訓練（ＤＩＧ）の概要

＜訓練の流れ＞
・「巨大地震の発生直後」、「避難所に向かう直前」、「発生から３時間後」のそれぞれの場面において、何を考え、どのように行動すべきかを生徒一人ひとりが考える。
・自分の考えを付箋紙に書き出し、グループで情報を共有し、意見交換を行う。

＜生徒の感想＞
・避難するまでの間に、自分の身の安全を守る方法、家族の安否の確認、避難時に持ち出す物の準備など、たくさんのことを考えて行動しなければならないことに気付いた。
・日頃から、災害が起きたときのことを家族で考えておき、心の準備をしておくことは大切なことだと、改めて分かった。

＜工夫した点＞
・災害による被害の状況を具体的にイメージさせることで、実際の場面でできる行動を具体的に考えさせた。



成果と課題

○　避難訓練では、長距離を移動することの難しさを生徒に理解させることができた。
○　災害イメージ訓練では、生徒に、避難を要する災害が起きたときのことを具体的に想像させ、災害に対する心構えを持たせることができた。
●　効果的な防災教育を推進するために、自治体や消防・警察等との連携を充実する必要がある。

No.18　地域の関係機関と連携した防災教育の取組

■管　　内　十　勝
■分　　類　☐避難訓練　☐防災教室　☑防災に関する授業　☐その他（　　）
■教育課程　☐教科（　　科）　☐総合的な学習の時間　☑特別活動
■校　　種　☑小学校（低）☑小学校（中）☑小学校（高）☐中学校　☐高等学校
■取組のポイント

従来の避難訓練に加え、地域の関係機関と連携した、地震や津波、水の事故などへの対応法について学ぶことのできる体験活動を指導計画に位置付け、児童の防災に係る意識やスキルの向上を図るとともに、非常時に互いに助け合う心をはぐくむ取組である。

■取組の実際

ねらい

防災教育を「生命を大切にする心」の教育と位置付け、避難経路の確認など安全を確保するための行動の在り方を身に付けるとともに、災害時には進んで地域の人々のために役立とうとする態度をはぐくむ。

内　容

海岸から約２００メートル離れた所に学校が位置しており、これまでの津波などの被害を受けた教訓から防災教育を指導計画に位置付け、消防署や海上保安署等と連携して、計画的・組織的に推進している。

≪指導計画（一部抜粋）≫

〔４月〕避難訓練・ＡＥＤ講習「火災から身を守ろう」（消防署と連携）
〔５月〕地域防災訓練日に実施する避難訓練「地震・津波から身を守ろう」（消防署と連携）
　　「避難所での自分の役割」（地域づくり協議会と連携）
〔９月〕着衣水泳講習「水の事故から身を守ろう」（海上保安署と連携）

※地域づくり協議会：防災や地域づくりに関する、地域住民や各種団体からなる組織

≪指導事例≫

〔５月〕「地震・津波から身を守ろう」（消防署と連携）

○　地震発生後に津波から避難するという想定の下、児童は学校から歩いて３分の地域コミュニティーセンター２階に避難する。
○　避難訓練の成果や課題について、消防署の方から講評をいただき、次回の訓練に向けた課題とする。
○　避難先のコミュニティーセンターで、自分たちは地域の人たちのためにできることを実行し、自分たちの役割について理解する。

「避難所での役割」
地域づくり協議会の方がレスキューキッチン装置を使い調理した昼食を、児童は参加者に配ったり、片付けを手伝ったりするなど、避難所での自分たちの役割を考え、活動しました。

成果と課題

○　災害発生時における避難経路の確認等、安全を確保するための行動の在り方について体験を通して理解を深め、防災に対する意識の向上を図ることができた。
○　避難場所での自分たちの役割（やれることややるべきこと）について理解を深めるとともに、避難所でのボランティア活動の大切さを実感できた。
●　訓練を継続的に行うことにより、児童の防災意識の向上をより一層図る必要がある。

No.19　マニュアルに頼らない防災訓練と関係機関と連携した防災教育の取組

■管　　内　釧　路
■分　　類　☑避難訓練　☑防災教室　☑防災に関する授業　□その他（　　）
■教育課程　□教科（　　科）　□総合的な学習の時間　☑特別活動
■校　　種　□小学校（低）□小学校（中）□小学校（高）□中学校　☑高等学校
■取組のポイント

○東日本大震災の教訓を生かし、最小限のマニュアルにより、各自が判断して主体的に行動する実践的・現実的な防災訓練を行う。
○日頃から防災の意識を高め、地域との実効的な連携を図るため、関係機関等と連携した授業や地域住民向けの講座を実施する。

■取組の実際

ねらい

教職員・生徒及び地域住民の危機管理意識を高め、自らの判断で行動する姿勢を身に付ける。
(1) 災害時における避難を実践的に行い、安全かつ迅速に避難できるよう防災への意識を高める。
(2) 非常時の避難経路・避難場所の決定までの方法や、教職員の取るべき行動を確認する。
(3) 地元で発生する可能性のある災害への認識と知識を地域住民とともに深める。

内　容

1　防災意識を高める効果的な避難訓練
（1）事前講話（６月８日）
演題　弟子屈町内で発生する自然災害と防災
講師　校長
内容　・東日本大震災の被災映像
・過去の弟子屈地震
・防災訓練に向けて

被災映像を上映

机の下に潜り、脚は対角線上をつかむ実演

（2）防災訓練（６月９日）
想定　６校時授業中に、震度６弱の屈斜路地震が発生。窓ガラス破損、壁・天井から落下物飛散。余震で校舎倒壊の恐れ。火災は発生せず。体育館は使用可能。
情報　訓練中に、想定外の次の情報が連絡。
・校舎内で通行不能２カ所発生
・負傷者１名（両足骨折→心肺停止）
・停電により放送機材使用不能

避難の様子（カバンで頭部を保護）

両足骨折者が心肺停止を想定した救助

感想　・本当に災害が起こったときはもっとパニック状態になるかもしれないけど、今回のような自分でできることを探す経験を、もしもの時に生かしたいと思った。
・何事も早く判断し対処すべきだということがよく分かったし、自分の身は自分で守ることが大切だと思った。
・今回の防災訓練を実際にやって、やっと大きな地震が身近に感じられた気がした。

2　教員による町民対象防災教育講座（１１月１日）
内容　弟子屈町公民館との連携による「親と子の実験教室～地震について学ぼう」
参加　親子の参加者数は３０名

3　気象台との連携による防災授業（１１月２日）
内容　理科総合Ｂ（２時間）において、地震災害、火山災害の内容について気象台職員が授業

液状化現象の実験（防災教育講座）

津波発生装置による実験（防災授業）

成果と課題

○　災害時において、その場面に応じて冷静に考え判断して行動することは、生徒、教職員両者にとって非常に難しいことがわかり、訓練の大切さを認識するとともに、防災への意識を高めることができた。
○　災害が起きた後、生徒の保護者への連絡手段や、外部からの避難者への対応、関係機関との連絡等の課題が明確になり、教職員の危機管理意識が高まった。
○　専門家からの、地震や津波等の現象やメカニズムについての説明や、実験等の体験学習が、防災教育についての実感の伴った理解につながるとともに、地域との連携の大切さを実感した。

No.20 東日本大震災被災地校に学ぶ「津波てんでんこ」の教えを生かした避難訓練

■管　　内　根　室
■分　　類　☑避難訓練　☐防災教室　☐防災に関する授業　☐その他（　　）
■教育課程　☐教科（　　科）　☐総合的な学習の時間　☑特別活動
■校　　種　☐小学校（低）☐小学校（中）☐小学校（高）☑中学校　☐高等学校
■取組のポイント

大地震、津波における危険を予測・回避し、適切かつ安全に行動することができるよう、学校と類似した環境にある東日本大震災被災地区（岩手県釜石市）に伝わる、津波避難の仕方や心構え等を示した「津波てんでんこ」を参考として、「全力で逃げる」「自分の身を守る」など、実効性のある避難訓練を行う。

■取組の実際

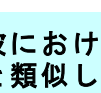
ねらい

地震と津波を想定し、第一次的な安全確保の適切な避難方法を身に付けるとともに、避難の際の機敏な行動力と判断力を養う。

内　容

【学校の環境】　漁業を機関産業とした海に面している街で、学校の目前にも海が広がり、高所へ避難しなければならない環境である。

東日本大震災発生後生徒会を中心に類似した学校環境の岩手県釜石市立釜石東中学校へ物資支援を行う。



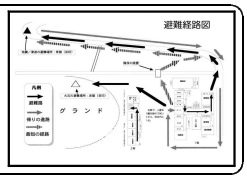
釜石東中より支援のお礼としてDVD「てんでんこレンジャー」が届けられる。

「てんでんこレンジャー」
津波に関する防災意識の薄い中学男子生徒が「てんでんこレンジャー」より“津波てんでんこ”の教えを学び、防災への意識を高めていく物語。

≪事前≫

◎「てんでんこレンジャー」を活用した津波避難についての事前学習

【生徒の学び】
○　安全なところを目指して全力で逃げる。
○　津波等の災害がいつきても対応できるように準備する。
○　避難場所や待合せ場所などについて普段から家族と話し合っておく。



《避難訓練》

☆　近海沖でＭ８クラスの地震及び大津波発生を想定

午後の授業中に地震発生！

避難経路を通って安全なところへ全力で逃げる。

〈第一次避難場所〉
標高４０ｍ、津波到達予想地点より高い場所に、全員で避難した。

≪事後≫

◎　訓練を振り返り、安全な避難の仕方や安全マップの内容などを、再確認した。

【生徒の感想】
○　避難経路が険しく、逃げるのが大変だったので、小さい子やお年寄りが逃げられるか心配になりました。
○　避難した後、家族とどこでどのように会うのか、もう一度、話し合う必要があると思いました。

成果と課題

○　“てんでんこ”の教えから生徒の防災意識が高まり、訓練において、短時間で安全に避難することができるようになった。
●　災害時対応マニュアルの見直しと避難経路等の定期的な点検を、これまで以上に行うとともに、近隣の幼稚園・小学校との合同避難訓練について検討するなど、地域と連携した取組を進める必要がある。